

《報告》

螢狩の唄を詠んだ狂歌・俳諧

後藤 好正

〒223-0057 神奈川県横浜市港北区新羽町 675-202

はじめに

万葉集ではわずかに一首、それも枕詞としてしか詠まれなかった螢は、平安朝和歌では九世紀末頃から詠まれ始める。上古ではあまり詠まれることが無く、平安朝の国風暗黒時代以降に詠まれる歌題の多くは、漢詩文の影響下で新たに文学素材として獲得されたという（丹羽，1992）。その後も螢は数多くの和歌に詠まれていくが、江戸時代には和歌から派生した狂歌や俳諧においても同様に多くの作品が生まれた。筆者は江戸時代に螢が詠まれた狂歌や俳諧を調査しているが、そのなかに螢狩の唄を踏まえて詠まれたと推定される作品をいくつも見出した。螢狩の唄は、螢狩の時に歌われたわらべ唄であるが、いまのところ江戸時代前期まで遡れることが分かっている（後藤，2016）。ここでは、螢狩の歌を踏まえて詠われた狂歌・俳諧を紹介し、資料としたい。

現在は螢狩の唄を含め動物や植物を歌った唄は、わらべ唄の種類のひとつとして扱われるのが普通であるが、民俗学者の柳田国男は童言葉（童詞）あるいは口遊びとしてわらべ唄と区別している（柳田・丸山，1987）。江戸後期のわらべ唄集でも『熱田手鞠歌』（高橋仙果著，天保初年頃（1930-31）成）には「熱田童諺」と、『尾張童遊集』（小寺玉兆著，1831（天保2）年自序）では「幼児口遊^{ウツスツ}」と記されている。また螢狩の唄は、螢を呼び寄せるための唄であることが特徴である。こうした点を考慮し、具体的な歌詞を踏まえて詠われたものだけでなく、「呼ぶ声」や「よぶ」「声」と詠われた句や歌についても、内容から螢狩の唄を踏まえて作られたと見ることができるものも取り上げた。

なお、ホタルの表記は螢で統一した。また、引用した作品は出典によって翻刻の程度が異なるが、カナ・踊り字（くはへと表記）はそのままとし、漢字は原則として通用字体に改めた。

「螢狩の唄」が詠まれた俳諧

江戸時代前期の俳諧発句に「螢こい」と詠んでいる句がいくつか見られる。いまのところ筆者の知る限り最も早く詠まれたのが次の句である。

螢こいと人はいふ也宇治の河 林見 『続山井』

宇治は古くから知られた螢の名所で、この句の上五「螢こい」は、螢狩の唄の呼びかけの詞であると考えてよからう。

晴る夜のほしかる人や螢こい 如自 『時勢粧』

如自の句は、『伊勢物語』八十七段に見られる〈晴るゝ夜の星か河辺の螢かもわが住むかたの海人のたく火か〉の詞取。「夜の星」から「欲しがる」に言い掛け、本歌の星と螢の見立てを受けて「螢こい」と詠んでいる。

豊前

螢こいと呼や豊前のこくらがり 梅翁 『誹枕』

『誹枕』は名所俳諧集であり、梅翁（西山宗因）は豊前の小倉（現北九州市）と薄暗い場所を意味する「小暗」を掛ける。日も落ちて辺りが薄暗くなり始めると、待ちきれないように子供達の「螢こい」と呼ぶ声が聞こえだす。

こいへといへと螢かとんてゆく 鬼貫 『仏兄七久留万』

序文に載る句で「八つになりけるとし」とあり、鬼貫8歳（1668年）の時の句という。螢に來いと呼びかけても、好き勝手に飛んで行ってしまふ、意にならない螢ではある。

螢こよといへど答えぬ思ひ哉 りん女 『芭蕉盃』

同じく呼びかけてもやっこない螢だが、りん女は、自分に振り向いてくれない想い人を重ねる女心を詠んだ。和歌では思ひのひと火を掛け、螢は口に出せず、胸の中で燃えさかる想いの火を象徴とする恋の虫でもあった。

螢こいへと振ても簍の袖 鶴老 『寂砂子集』

簍には袖が無いので、「ない袖は振れぬ」のことわざを踏まえて、螢に來いと呼びかけてもやっこないという意味か。

三の間の水ハ甘ひか飛ぶ螢 翠翁 『宇治川兩岸一覽』

「水は甘いか」はあっちの水型の螢狩の唄の文句取り。『宇治川兩岸一覽』は暁晴翁（暁鐘成）著の名所図絵で、三の間は宇治橋にある張り出しのこと。もとはここに橋姫が祀られていた。南（1961）がこの句を豊臣秀

吉の作としたのは誤りで、作者翠翁は幕臣で国学者・俳人でもあった久松祐之である。

行^{ゆく}螢あちらの水がうまひやら 可候 『三韓人』

可候は信濃国^{かみみのち}上水内郡^{さみず}三水村毛野（現長野県飯綱町）の豪農で、一茶の門人。あっちの水型の歌詞には、「あまい」の代わりに「うまい」と歌われる唄もある。飛び去って行く螢に対し、あっちの水の方がうまいのだろうかとする。また一茶の次の句

飛^そ螢其手はくわぬくわぬとや 一茶 『おらが春』

の「其手」も、甘い水を餌にして呼び寄せようとする螢狩の唄を指しているのだろう。「螢こい、……、こっちの水は甘いぞ」の後に、「甘い方へ飛んでこい」「柄杓持てこい、汲んでやろ」などと続く唄もある。『おらが春』には〈はつ螢其手はくわぬとびぶりや〉の別句もある。

鼻や螢へを呼ぶように 一茶 『七番日記』

は、フクロウの「ホー、ホー」という鳴き声を、螢狩の唄の歌い出しの「ほーほー螢こい」の「ほーほー」と見なしている。

曲水の子をいたみて
呼^{よぶ}声はたえてほたるのさかり哉 丈草 『泊船集』

この句を、夜も深まって螢狩にやっていた子供達が家に帰っても、螢はますます活発に飛び交っていると解釈する人もおり（加藤，1978；南，1961など）、実際に西日本のゲンジボタルの習性をうまく言い表している。しかし、この句には「曲水の子をいたみて」の前書がある通り、今年は「螢こい」と呼びかける子が亡くなっていないのに、去年までと同じようにたくさんの螢が今を盛りと光っている、と詠んだ句である。曲水（曲翠）は近江膳所藩（滋賀県大津市）の重臣菅沼定常の号で、蕉門の俳人でもあった。

呼^{よぶ}声をはり合^{あひ}に飛^{とぶ}螢哉 一茶 『八番日記』
あちこちの声にまごつく螢哉 一茶 『七番日記』

前の句は、子供達の唄声に負けじと飛び交う螢に、一茶は捕まるなど肩入れしている。後の句は、あちこちから子供達の唄声が聞こえるので、螢はどこへ飛んでいこうかとまごついていると詠んでいる。一茶には螢の句で「よぶ」と作った作品も多く見られるが、そのうちのいくつかを紹介する。

妹^{いも}が子やじくねた^な形りではよぶ螢 『七番日記』

わんぱくや縛れながらよぶ螢 『おらが春』
 螢よぼうしろにとまる螢かな 『文政句帖』
 うそ呼^{よび}としらず^{よく}に行かはず螢 『文政句帖』

ちなみに、一茶には他にも天体気象の唄の「大寒小寒山から小僧が泣いてきた」の歌詞を詠み込んだ〈むら時雨山から小僧ないて来ぬ（『七番日記』）や、子守歌・口遊歌の「お月さまいくつ、十三七つ…」を詠み込んだ〈青梅も十三七つ月よ哉（『七番日記』）などの句もある。

「螢狩の唄」が詠まれた雑俳

雑俳についてはあまり調査が進んでおらず、目にとまったのは今のところ下記の一句だけである。

△はづかしへへ
 螢来い我は紋日の余り物 東海 『はいかい室の梅』

前句付の句（△は前句）。紋日（物日）は遊郭で、五節句などの特に定めた日をいう。この日は規定の花代が割増され、祝儀も弾まなければならなかった。なじみの遊女に先客がいたのだろうか、あるいはお金がかたくなかったのだろうか、紋日なのに遊郭にも行かずに、こんな所で「螢来い」と呼んでいる己が恥ずかしい。

「螢狩の唄」が詠まれた狂歌

これまでのところ、筆者が知る螢狩の唄を踏まえて詠まれた狂歌の初出は、1734(享保19)年刊の『置みやけ』に載る二首である。狂歌では、「螢こい」とのみ歌い込まれた歌、「螢こい、むしむし」が歌い込まれた歌、あつちの水型の唄を踏まえた歌、螢の親爺型（昼は草葉の露飲んで型）の唄を踏まえた歌の4つのタイプが確認できる。なお、螢狩の唄を踏まえた歌が見いだされたのは上方狂歌集のみであり、これまでのところ江戸狂歌では確認に至っていない。

石山にて
 ゆふ月の影うすものゝ扇にて打よする浪のほたるこひへ 貞柳 『狂歌月乃鏡』

螢
 蚊をおひし手こそ螢をこいへとよふは團^{うら}のうらおもて也 砂長 『狂歌千種園』

配所螢
 螢こいとたゝ手をあけてまねくのは彼俊寛かまねやしま守 紙丸 『狂歌かたをなみ』

いずれも「螢こい」の歌詞のみを使っている歌。砂長の歌は、蚊を追い払う手の動きを、螢を追う団扇の動きに見立てている。紙丸は「螢こい」と手を挙げて招く動きを、俊寛（平氏追討の謀議に加わったとして鬼界ヶ島に流された法勝寺の僧）が手招きする仕草に見立てる。歌舞伎『平家女護島』に「岸の高みに駆け上がり、爪立ちて打ち招き」とある。

橋辺蚊

来いと待螢は来いて呼はぬ蚊のむしくる夜さや橋詰に出て 貞也 『和哥夷』

宇治螢見に罷りて

いささらば川辺に出て螢こひむしへ 暑さもしはし忘れん 鈍莫 『興太郎』

追善会当座題 寄虫尺教任出詠遅速

火宅をは出てもあつき夏の夜は螢よふにもむしへと言ふ 安羅 『夷歌哥ねふつ』

橋辺螢

双六のさいはひ橋のほとりとて螢こひ目をよふやむしへ 鼠舌 『狂歌三年物』

これらの歌はいずれも「螢こい、むしむし」が詠み込まれている。1679（延宝7）年の『誹諧破邪顕正』（中島随流著）に、「たゞ、わらべの「ほたるこい、むしへ」といふほどに」と見え、かつてはこの歌詞を持つ唄が歌われていたのではないかと思われる。貞也は橋のたもとに出ても呼ぶ螢は来ずに、呼んでもいない蚊が来る蒸し暑い夜を詠むが、「(蚊という)虫(が)来る」を「蒸し(て暑)苦(しい)夜」に言い掛ける。安羅の歌は追善会で詠まれたものなので、火宅という仏教用語を使うが、「この世は汚濁と苦悩に悩まされて安住できない(ことを、燃えさかる家にたとえた)」という本来の意味ではなく、単に暑い家の意味で用い、そうした家を出ても暑い夏の夜は螢を呼ぶのにも蒸し蒸しと言う、と詠む。いずれも「虫」を「蒸し」に掛けた歌である。鼠舌は「双六の賽」から「さいわい橋」を、「螢こい」から「乞目(双六等で出て欲しいと思っっている賽の目)」を言い掛けている。

螢

こちの水はあまいそ桂あめの夜に子は螢取かはつゝみ 幾粒 『狂歌あさみとり』

婦人螢狩

『和哥夷』

水嗅い情の露を甘いとて狩る螢迄たますたはれ女 量太
うかれ女かまねく螢やこちの水あまい手管の露の情に 可呑
こちの水は尼かむれつゝ螢取て入る袋の中の庵に 楚雀
水は甘い流れの君にかりとられ螢も露の情うくるか 巨兆

螢入袖

草分てぬれにし袖に入る螢あまいといふてたらす水より 素人 『狂歌芦の若葉』

螢

螢こいこつちの水はうまい事其手はくはぬと尻に聞ゆく 鈍永 『夷歌歌ねふつ』

螢

わらはへの手にもとらるゝ螢こそちの水よりあまひ物なれ 花夕 『狂歌千種園』

これらの歌は、あつちの水型の唄を踏まえて詠まれたものである。幾粒の歌は「あまいぞ」を受けて「桂飴」につなげ、飴を雨と掛けて雨の夜へと展開する。桂飴は山城国桂の里で産した名物の飴で、桂女が所司代に献上したり、京の町を売り歩いた。量太、可吞は「露」に「甘い」を付けているが、高橋仙果が編んだ『熱田手鞠歌』には「螢こい、露のましよ、あつちの水はにがいよ、こつちの水はあまいよ」とある。当時の人は螢に露（水）を与えると長生きすることを知っていたので、露と甘いを見ればあつちの水型の唄に関連づけられたであろう。楚雀の歌は「甘い」と「尻」を掛けている。鈍永の歌は一茶の句と同想であるが、時代的にはこちらの方が先である。

螢

呼ぶ声を尻に聞してとんで行ほたるは露をなめくさりめか 活水 『狂歌あさみとり』

螢狩の唄を踏まえた狂歌で、「呼ぶ声」と詠われた歌はこれしか確認できなかった。「露をなめ」とあるので、あつちの水型の歌を念頭に置いて呼んだ歌であろう。「なめる」には露だけでなく人も掛けてあり、なんとかおびき寄せようとする人を尻目に飛び去る螢に、「なめくさって」と毒づく。

螢

貞柳 『置みやけ』

螢こひ女房もの乳をのましよ金の釜ハ出うと出まひと
ほたるこひちゝをのまさふ姥玉の闇にありくも子共すかしに

池辺螢

ほたるこひ乳をのまそとゆう暮にうはか池よりはふて出らん 一好 『狂歌浪花丸』

これらの歌は螢の親爺型の唄の文句取りである。この型の唄は全国的には「昼は」に続けて「草葉の露のかげ」「草葉の露吹いて」などと歌われていたが、京都周辺では「昼は……の乳飲んで」と歌われていたようである。貞柳の前の歌の「金の釜」の意は不明だが、かつてはこの言葉が入った唄があったのだろうか。貞柳のあとの歌の姥玉は闇に掛かる枕言葉で、「昼は乳母の乳飲んで」の歌詞から姥（乳母）に言い掛け、

真つ暗闇を怖がって歩く子供を宥めるために、螢狩の唄を歌ってみせる。一好は「ちちのまそ」から姥に結びつけ、さらに「(童言葉を) 言う」と「夕暮」を掛けてる。姥が池は乳母が池と表記されるところもあり、乳母が育てていた子を誤って池に落とし、自らも身を投じた、といった伝承を持つ池のこと。

引用書目

俳諧書

続山井	湖春編，俳諧撰集／寛文7（1667）年刊
<small>イマヨウスガク</small> 時勢粧	維舟（重頼）編，俳諧撰集／寛文12（1672）年自奥書
誹枕	幽山編，名所俳諧集／延宝8（1680）年素堂序
泊船集	風国編，俳諧撰集／元禄11（1698）年刊
芭蕉盃	有隣編，俳諧撰集／享保9（1724）年刊
<small>キトニオナオケルマ</small> 仏兄七久留万（七車）	鬼貫著，俳諧稿本／享保12（1727）年序
<small>キビスナゴシユウ</small> 寂砂子集	太筈編，俳諧紀行・句集／文化7（1810）年刊
三韓人	一茶編，俳諧撰集／文化11（1814）年刊
七番日記	一茶著，俳諧稿本／文化7年から文政元（1818）年
文化句帖	一茶著，俳諧稿本／文化元（1804）年から5（1808）年
おらが春	一茶編，俳諧句文集／嘉永5（1852）年刊

雑俳集

はいかい室の梅	一瓢齋其楽評／安永6年（1777）前後刊
---------	----------------------

狂歌集

置みやけ	由縁齋貞柳詠・永田貞竹編／享保19（1734）年刊
狂歌月乃鏡	由縁齋貞柳詠・栗柯亭木端編／延享3（1746）年刊
興太郎	九如館鈍永撰／宝暦3年（1753）刊
狂歌浪花丸	白縁齋梅好撰／明和8（1771）年刊
夷歌哥ねふつ	御射山社紅圓撰／安永2（1773）年序
狂歌三年物	麦里坊貞也撰／安永5（1776）年序
狂歌かたをなみ	雌雄軒蟹丸撰／寛政8（1796）年刊
和哥夷	四穂園永田貞也撰／享和3（1803）年序跋
狂歌あさみとり	柳條亭小道撰／文化3（1806）年跋
狂歌芦の若葉	得閑齋繁雅撰／文化4（1807）年刊
狂歌千種園	得閑齋繁雅撰／文化12（1815）年刊

名所案内記

宇治川兩岸一覽	暁鐘成著／文久3（1863）年刊
---------	------------------

引用文献

- 飯田正一 他校注 (1972) 誹諧破邪顕正. 談林俳諧集 2 古典俳文学大系 4. 集英社.
- 後藤好正 (2016) 螢狩の唄考～螢狩の唄が歌われはじめた時期について～. 豊田ホテルの里ミュージアム研究報告, (8). 179-182.
- 堀内秀晃・秋山虔 校注 (1997) 竹取物語 伊勢物語 新日本文学大系 17. 岩波書店.
- 神田豊穂 編 (1926) 誹枕. 談林俳諧集 日本俳書大系 4. 日本俳書大系刊行会.
- 神田豊穂 編 (1927) 寂砂子集. 近世俳諧名家集 日本俳書大系 13. 日本俳書大系刊行会.
- 加藤陸奥雄 (1978) 虫と俳句. むし虫蟲. 金港堂出版.
- 小林計一郎 他校注/信濃教育会 編 (1979) 一茶全集第 1 卷 (発句). 信濃毎日新聞社.
- 真鍋広済 編著 (1969) 置見やけ, 狂歌月乃鏡. 未刊近世上方狂歌集成. 清文堂出版.
- 丸山一彦・小林計一郎 校注 (1970) 三韓人. 一茶集 古典俳文学大系 15. 集英社.
- 南 喜市郎 (1961) ホテルの研究. 太田書店.
- 西島孜哉 編 (1988) 狂歌あさみとり. 近世上方狂歌叢書 11. 近世上方狂歌研究会.
- 西島孜哉 編 (1989) 狂歌三年物. 近世上方狂歌叢書 12. 近世上方狂歌研究会.
- 西島孜哉・光井文華 編 (1990) 興太郎. 近世上方狂歌叢書 13. 近世上方狂歌研究会.
- 西島孜哉・光井文華 編 (1990) 和哥夷. 近世上方狂歌叢書 14. 近世上方狂歌研究会.
- 西島孜哉・光井文華 編 (1991) 夷歌哥ねふつ. 近世上方狂歌叢書 15. 近世上方狂歌研究会.
- 西島孜哉・光井文華 編 (1992) 狂歌千種園. 近世上方狂歌叢書 17. 近世上方狂歌研究会.
- 西島孜哉・光井文華・羽生紀子 編 (1994) 狂歌浪花丸. 近世上方狂歌叢書 20. 近世上方狂歌研究会.
- 西島孜哉・羽生紀子 編 (2002) 狂歌かたをなみ. 近世上方狂歌叢書 29. 近世上方狂歌研究会.
- 丹羽博之 (1992) 平安朝和歌に詠まれた蛍. 大手前女子大学論集, (26):85-100.
- 尾原昭夫 (1991) 近世童謡童遊集 日本わらべ歌全集 27. 柳原書店.
- 小高敏郎 他校注 (1971) 時勢粧, 続山井. 貞門俳諧集 2 古典俳文学大系 2. 集英社.
- 岡田利兵 (1968) 仏兄七久留万. 鬼貫全集. 角川書店.
- 鈴木勝忠 校訂 (1987) はいかい室の梅. 宝暦地方会所本集 雑俳集成第一期 8. 東洋書院.
- 鈴木康久・西野由紀 編 (2007) 京都宇治川探訪—絵図で読みとく文化と景観. 人文書院.
- 柳田国男・丸山久子 (1987) 改訂 分類児童語彙. 国書刊行会.
- 安井小酒 編, 石川真・木村三四吾 校注 (1971) 芭蕉門名家句集 1・2 古典俳文学大系 8・9. 集英社.